

令和 2 年 6 月 18 日現在

機関番号：14701

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K01634

研究課題名（和文）体育授業におけるフロー体験につながる自律的な勤勉性の育成

研究課題名（英文）Foster autonomous industry(diligence) leading to flow experience in physical education class

研究代表者

村瀬 浩二（Murase, Koji）

和歌山大学・教育学部・教授

研究者番号：90586041

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は勤勉性に影響する教師行動や子どもの体験を抽出し、勤勉性や没頭度に与える影響を検証することを目的とした。そこで、体育授業における教師の発問と協働での問題解決過程に着目した。その結果、中学校のハードル走単元や小学校のゴール型ゲーム単元において、協働での問題解決による技能向上の過程が、挑戦度と没頭度を高めることが確認された。さらに、低学年の水泳単元では、適切な発問に対してより必要感を高め、協働で挑戦し身体のコントロール感を習得する過程に没頭が高まることが確認された。これらの研究は、協働での問題解決過程による技能習得が没頭度を高め、教師にはそれを導く教材づくりの必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、体育授業における「勤勉性」の育成に焦点を置き、それらに与える教師行動や子どもの体験を明らかにすることを目的とした。その結果、課題の明確化と、そこに焦点化するため教師による発問の重要性が明らかとなった。

これは、新学習指導要領における資質・能力や見方・考え方の育成の筋道を示したと捉えられる。つまり、教師の指導方法を運動に対する見方・考え方を従来の習熟・達成から、思考力・判断力・表現力の充実へと導く教材づくり、発問づくりへと捉え直すことができ、それによって仲間との協働や生涯スポーツ実践への資質・能力を育む方策を提示できた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to extract teacher behaviors and children's experiences that affect diligence and flow experience. Therefore, this research focused on the questioning of teachers and the problem-solving process through collaborative learning in the physical education class.

As a result, it was confirmed that the process of skill improvement through collaborative problem-solving in the hurdle-running unit at junior high school and the goal-type game unit at elementary school creates a challenge opportunity and immerses itself in the exercise. In addition, it was confirmed that in the swimming unit of the lower grades, the feeling of necessity was raised by appropriate questioning, and the immersion in the process of learning the sense of control of the body was increased. These results indicate that the problem-solving process in collaboration increases the degree of immersion and teachers need to create teaching materials to guide them.

研究分野：体育科教育

キーワード：没頭 思考力・判断力・表現力 発問 課題の明確化 挑戦 身体のコントロール感 協働

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年、幼児教育では非認知型能力が重視されている。この非認知型能力には自尊心や自制心、勤勉性、協調性などが含まれる。この幼少期における非認知型能力が、成人後の身体的健康や貯蓄、犯罪行為などを予測すると報告されている (Moffitt et al., 2011)。

非認知型能力のなかでも、最近注目を集めている能力が勤勉性である。勤勉性は、努力過程や没頭する能力である。この勤勉性は成人期の職業や健康に影響を与える。例えば、戸田ら (2014) は、幼少期の勤勉性や社向性が、就職の形態 (正規雇用か否か) に影響すると述べ、Goodwin & Friedman (2006) は成人期における心身の健康状態と勤勉性の間に強い関係があることを示した。このように非認知型能力、なかでも勤勉性は、生涯を通じて大きな影響力を持つものであり、学校教育における教育的意義も高い。

また、勤勉性は体育において重要な役割を果たす。例えば、運動技能の習熟は時間を要することから、子どもの技能習熟の道のりは勤勉性によって支えられる。体育授業は、単元のなかで技能、思考・判断、態度の習熟を図る。勤勉性の高い子どもは、色々な工夫をしながら我慢強く技能を向上させる。その過程で、楽しさの体験であるフローを体験し、自身の努力で成果を得られる認識を得る (自己決定の認識)。そのことが、さらに勤勉性を高める循環モデルを想定できる (図1)。

また生涯スポーツの継続には勤勉性が大きな役割を果たすであろう。このことは体育科での目標でもある生涯スポーツへの能力を育成することになると解釈できるから、体育科において勤勉性を育むことは教科の目標にも合致する。

村瀬らは体育における勤勉性を明らかにすることを目的として、過去3年間の科研費研究 (課題番号: 26350716) において以下の研究を行った。課題解決場面を設定した小学校体育授業実践から、勤勉性に関わる要素を抽出し、「体育勤勉性尺度」を作成し、勤勉性を高めることを目的とした授業実践を実施した。得られた成果が、村瀬ら (2017) の体育勤勉性尺度である。この尺度は「勤勉さ」、「挑戦機会の発見」、「積極的発言」、「仲間への共感」の4因子で構成されている。これらの因子はフロー体験との相関から、没頭度と相関が高いことが確認された。つまり、性格特性としての勤勉性は、物事に没頭する傾向を現すと言える。また、この尺度は勤勉性だけではなく、自己決定に着目した尺度であり、自律的な勤勉性を測定することを目的とした。つまり、これは受動的勤勉性 (東, 1994) と区別するものであり、主体的学習を求める体育学習で育むべき能力を示すことができる。さらに、では小学校体育授業において戦術学習を用い、努力の方向性を明示とその成果の認識を容易にすることを目的とした授業実践を試みた。この授業実践において、勤勉さや挑戦機会の向上について一定の成果を得たが、自律的な勤勉性としては不十分な成果しか得られていない。つまり、自律性・自己決定を育むには不十分な実践の成果であった。

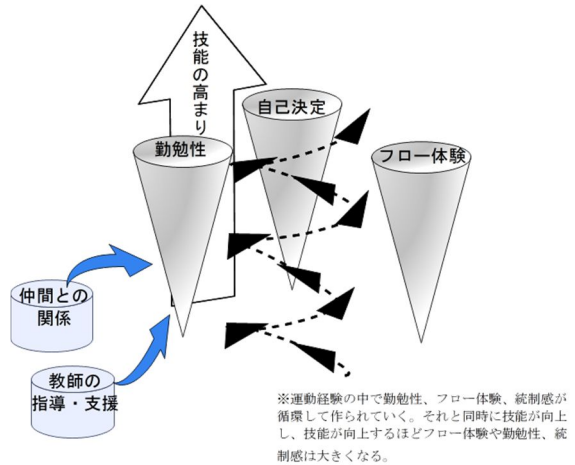


図1 体育における子どもの勤勉性モデル

2. 研究の目的

研究開始段階までに得られた課題は、努力過程に対する教師のフィードバックや、フロー体験や失敗体験、子ども自身による努力過程に対する自己評価など、様々な要因によって勤勉性や没頭度を高める可能性である。なかでも、体育授業を経営する教師の行動が勤勉性や没頭度に与える影響は大きいであろう。そこで本研究では体育授業場面から、勤勉性や没頭度に影響する教師行動を抽出、検証することを目的とする。

3. 研究の方法

小学校・中学校の体育授業単元を対象とした授業観察を実施し、単元前後の体育勤勉性質問紙による調査を行う。また、観察による質的分析、授業実践における形成的評価の分析から教師や仲間からの関わりのなかで、勤勉性と没頭度を高める効果的な要因を明らかにする。

4. 研究成果

4.1 研究 中学校体育におけるハードル走単元での学びの検証

中学校体育授業ハードル走単元の授業実践において、その観察と体育勤勉性尺度を用いての勤勉性に与える影響を検証した。この実践は日常的に協調学習を実践する中学校において行われ、ICTを用いたハードル走単元を実践し、その学習成果を検討した。

4.1.1 実践内容

中学校2年生4クラス139名を対象に、ハードル走8時間単元を実践した。内容は第4時、第5時の振り上げ足や抜き足の「見方」や第7時の「見て気づく」といったテーマである。また、第6時以降にiPadによるハードリングの撮影を行い、ICTを課題提示、問題解決、評価の3つの役割に用いた。

4.1.2. 調査内容

単元前後の比較を、体育勤労性尺度 4 因子と 4 因子の合計についてそれぞれ単元の前後に
ついて対応のある t 検定によって検討した。

4.1.3. 結果及び考察

体育勤労性の単元前後の比較

単元の前後において、体育勤労性
尺度 4 因子中、勤勉さ、挑戦機会の
発見、積極的発言が有意に向上し、
体育勤労性合計も有意な向上を示し
た(図2)。これらの結果は、今回の
単元によって学習者の自律性を測定
する体育勤労性尺度のうち、仲間へ
の共感以外の全ての面に効果的であ
ったことを示し、全体でもその効果
を確認できたことを示している。各
因子については、仲間への共感のみ
単元前後において有意差が認められ
なかったが、日常的な協調学習の実
践校での実践であり、日常的にグル
ープメンバーへの理解や共感があり、
この実践においてそれ以上に高
まることは期待できなかったと解釈
できる。

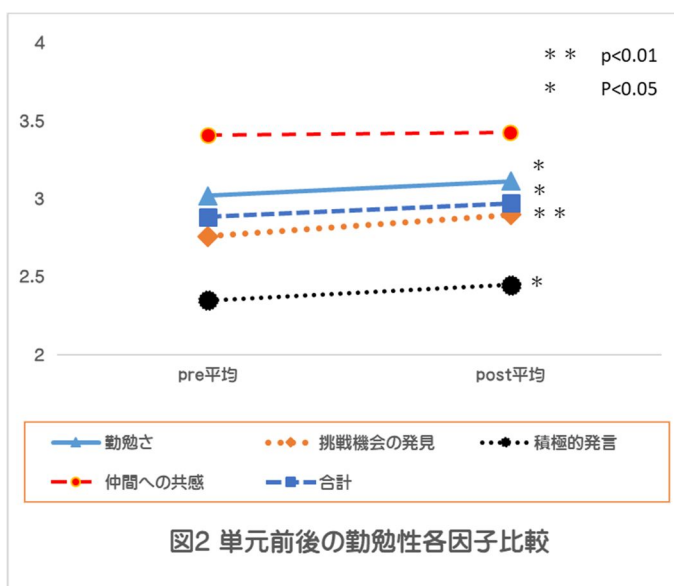


図2 単元前後の勤労性各因子比較

次に、挑戦機会の発見は問題解決

に向けて何らかの解決手段を探そうとする思考的努力である。人は没頭する中で受動的に課題
に取り組むのではなく、自身で問題を解決しようとする思考的努力に楽しさ
を感じる。このことは、自身を統制することに対してフロー状態を感じるとしたチクセントミハ
イ(1996)の報告にも通じる。本実践においては、このような挑戦への材料となる要素を各グル
ープのリーダーを通じて伝達した。例えば、振り上げ足(第4時)や抜き足(第5時)がそれにあたる。
このような要素をリーダーに伝えると共に、iPad にモデルとなる動作を提示し各グループで視聴
できるように配布した。ハードル走のようなクローズドスキルの種目は、このような理想動作と自
身の身体感覚を比較しながら、近づけていく過程に学びが生まれるであろう。本実践は、その比
較過程の中に他者との協力的な問題解決を想定した。このような単元構成が、この挑戦機会の発
見の向上に反映されたと解釈できる。また、こうして挑戦機会を探ることによって、学習者が没
頭の体験することに繋がったと推察できる。

また、積極的発言は自律的な発言によって問題解決をしようとする働きかけである。この積極
的発言が向上したことは、前述のように運動モデルを提示することで、学習者に自身の動きとは
違う問題意識を発生させ、その解決段階においてグループメンバー間や教師に対する働きかけ
を起こしていたと想定できる。このことが積極的発言を向上させたと解釈できよう。

4.1.4. まとめ

本研究では、教師が学習者間の問題解決過程を意識し、技能の習得につながる学習過程を形成
した。その問題解決過程は ICT による可視化とグループでの問題の共有によって起きることを、
教師が想定したものである。このような、可視化、焦点化した問題解決過程が学習者の思考力を
活性化させ、それを実践するなかで没頭度を高めたと推察できる。このような学習者同士の繋が
りによる問題解決過程が、ハードル走のようなクローズドスキルの学習においては学習者に「主
体的・対話的で深い学び」を保証することになる。

また、本研究の課題として、単元前後の量的研究だけでは、教師や子どもの体験が勤勉性や没
頭度に与える影響を検証することが困難であることが確認された。これ以降の研究においては、
質的研究や形成的評価の必要性が示唆された。

4.2. 研究 ゴール型ゲームにおける子どもの学び - 児童の対話と教師の働きかけからの検証 -

小学校体育中学年ゴール型ゲーム単元において、児童が「対象(教材)」、「他者」、「自己」との
「かわり」を経験することによって、ゲームに没頭する過程を質的に検証した。質的検証は、対
象グループとした児童5名の行動や発言、対話の様子などを中心に文字に起こした。この質的デ
ータを分析する中で、単元を通して大きな変化が見受けられる児童Mを抽出した。また、体育勤
労性の変化を単元前後で検証した。

4.2.1. 実践内容

授業は、全7時間で行われた。教材は、ゴール型ゲームであるザースボールであった。授業構
成は、全て担任教員が計画した。また共有課題については各時間の冒頭に発問を交えた問題提起
を行い、子ども達の回答のなかから課題を提示した。

4.2.2. 調査内容

観察、ビデオ調査、単元前後における質問紙調査（体育勤働性尺度と運動有能感尺度）

4.2.3. 分析方法

観察記録等を元に、対象グループの児童5名の行動や発言、対話の様子などを中心に文字起こし、Modified-Grounded Theory Approach (M-GTA)の分析手順に従い、研究者2名の話し合いのもと分析を行った。M-GTAによる分析で、生成した概念から、単元を通して変化が見受けられる児童Mを抽出した。この児童Mに関わる概念を抽出し、類似している概念を集め、グループを生成した(図3)。

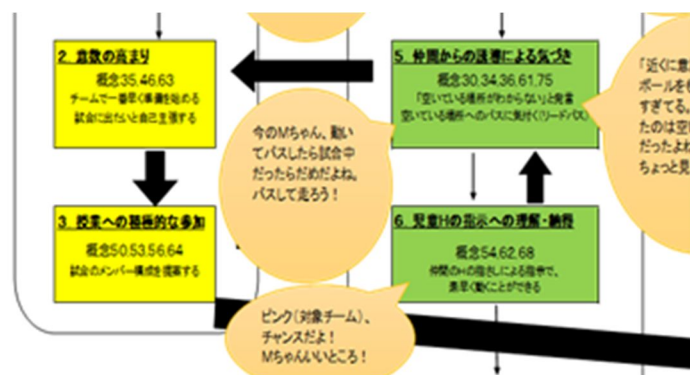


図3 概念図(抜粋)

結果、児童Mは、指示による5. 気づき 2.意欲の高まり 3.ゲームへの積極的参加 6.指示への理解・納得 5.指示による気づき 2. ...のサイクルを繰り返し、ゲームへの意欲とゲーム理解が交互に影響し合うことが推察できる。このサイクルに対して仲間や教師からの働きかけがあった。それは、序盤に児童Mが動き方を理解できず立ちすくむ様子に対し、教師によるコート内での児童Mとの位置取りの確認や、指さしでの指示の働きかけである。また仲間からは、動き方の指示や、フリーな児童Mへのパス、指さしでの動きを指示などの働きかけがあった。このような仲間の働きかけに対し児童Mは反論するなど主体性が見られるようになり、最終的には児童Mが仲間に動き方の指示を出すに至った。この過程において、児童Mは戦術理解とともに自身のゲームでの動きを想像し、それを実践する過程を経たと推察できる。この想像 実現の過程において、子どもは運動に没頭していくと解釈できる。

4.2.5. 体育勤働性と運動有能感尺度の検証

単元前後において、体育勤働性と運動有能感尺度の変化を検証したところ、体育勤働性における「挑戦機会の発見」と「積極的発言」が有意に向上していた。これは、本単元が子ども達に挑戦機会を与え、解決方法を想像させたことを示す。また、それに対して、チーム内での発言を活発化させたことが、積極的発言の向上から示唆される。ただし、勤勉さが向上しなかったことから、クラス全体の没頭度は不十分であったことが示唆される。これは、ボール運動では、グループ内でのめごと等が起きやすく、そのめごとを通過した上での問題解決できた子どもに没頭が起きると解釈できる。そのため、不満を抱え没頭できなかった子どもの存在が本結果に表れたと解釈できる。一方、運動有能感はどの因子も有意な向上は認められなかった。先行研究における運動有能感の向上を認めた実践報告は、振り返りカードや得点の記録など量的なフィードバックを用いることが多いが、今回はそのようなフィードバックを行っていない。そのため、上手になったという実感は得られなかったのであろう。この結果から、運動有能感と没頭度は相関するものではなく、少なくともボールゲームにおいては有能感の向上がなくとも、ゲームに没頭することが示唆された。

4.2.6. まとめ

本研究は、小学校におけるボール運動単元でザースボールを実践し、観察から子どもが運動に没頭する過程を抽出した。ボール運動のような戦術的理解が重要とされる種目において、その理解が技能の向上に直結し、それを実践しようとする過程に主体性、没頭といった姿が生まれることが示唆された。また、量的検証から本単元は問題解決への挑戦と協働を促し、ゲームに没頭する過程を導いたと解釈できる。

4.3. 研究 水泳授業における没頭度の変化-小学校2年生を対象に-

本研究は没頭度の検証を、形成的に測定することを目的に、形成的没頭度質問紙を試作し、実践のなかでその変化を検証した。授業実践は、動物のマネのなかで水に親しみながら、もぐり方・浮き方を身につけることをねらいとした小学校2年生の水遊び授業とし、その実践記録から水遊びが没頭度と挑戦度の変化に与える影響を考察した。

4.3.1. 調査内容

体育勤働性尺度(村瀬ら, 2017)を元に、没頭度(3問)と挑戦度(3問)に関する設問6問を作成し、毎時間授業終了後に担任教員が実施した。設問は1(まったくしなかった)~3(たくさんそうした)の3件法とし、没頭度と挑戦のそれぞれを平均した。これらの値について、時間を基準変数とし、没頭度または挑戦度を従属変数とした対応のある一元配置分散分析を行った。

4.3.2. 結果

毎授業後に児童の回答した「没頭度」と「挑戦度」を毎授業に集計し、学級全体の平均した値が図4である。時間ごとの没頭度を比較したところ、第1時と第6時に有意に低く、第7時、第8時が有意に高いことが明らかとなった。

また同様に毎時間の挑戦度については第3時、第4時、第8時が有意に高く、第1時、第2時、第5時が有意に低いことが明らかとなった。

4.3.3. 考察

本実践において、児童は呼吸のコントロールと浮くことを習得する過程で徐々に没頭していた。それは、前半(第2時~第5時)では呼吸をコントロールする課題の提示に対して、挑戦的な課題の解決に取り組む過程において徐々に高められたと捉えられる。また、後半(第7時~第8時)はペア学習による感覚の共有と、浮くことの体験によって没頭したと解釈できる。この浮くことの体験は、呼吸のコントロールと脱力というキーワードにより多くの児童が体感できた。このコントロール感、フローの源泉とされ、自身のコントロール感を得ることが没頭を生み出し、さまざまな浮き方に变化させたことで最も高い没頭度であったと捉えられる。こうして、自身の能力を発見することは、自己概念を拡大しようとする遊びの過程(エリス, 2000)において没頭が起きると捉えることができよう。

一方で、第2時、第3時、第4時、第5時には挑戦度が一時的に高まったものの、没頭度にあまり上昇が見られなかった。これは、呼吸のコントロール課題が徐々に難易度を高めたことによって挑戦度を高めたが、呼吸のみに焦点化した課題であり、水中での身体感覚の変化を感じる児童らにとって、呼吸だけではもの足らなかったと推察できる。そのため、没頭度を高めるまでは至らなかったと解釈できる。つまり、挑戦的ではあり、達成可能な課題ではあったものの、水遊びとしての特性における楽しさを感じられなかったと解釈できよう。しかし、第7時、第8時の浮く動作への没頭を考慮すれば、このような焦点化した課題期間は重要な意味を持つことが示唆される。

この実践を通して、低学年における「浮く、もぐる」の習得は、息をこらえる、吐くという呼吸のコントロールの習得から入ることがスムーズな導入となり、この必要感を発問によって引き出すことの重要性が示唆された。呼吸のコントロールを十分に学んだ後、様々な浮き方に移行することで、その習得がスムーズに行われ、児童らはストレス無く没頭できたと解釈できる。

4.3.4. まとめ

低学年の水遊びにおいては呼吸から全身へ身体のコントロール感を広げ、それを協働的に学習する過程作りが、児童の没頭度を高めるのには必要であった。この過程において、教師は発問によって焦点化し、その必要感を引き出すことによって、子どもを没頭へと導いたと解釈できる。

4.4.3 力年のまとめ

これらの研究を通じて、単元前後に認められた勤働性や授業において認められた没頭度は、仲間と協働で問題解決に向かう挑戦的思考と、その想像を実現しようとする過程によって生まれていた。特に、その実現過程において、自己のコントロール感が高まることはどの結果にも共通する。このコントロール感の高まりを自律的に生み出せることが没頭度の理想であろう。また、この勤働性や没頭度は、技能の上達や有能感とは関わりなく発生することが示唆された。また、これらは、教師や仲間による課題の明確化、焦点化とそれを学習者に伝える適切な発問によって導かれることが示唆された。

今後の課題は、研究で用いた形式的な没頭度質問紙が妥当性や信頼性の検証を経ておらず、一般化できていないことである。これを尺度化することにより、毎時間の没頭度の変化を測定することができ、より多くの場面における働きかけの有効性を検証することが可能となる。

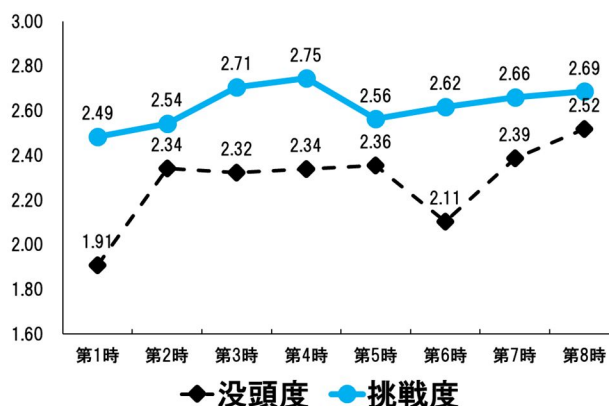


図4 没頭度と挑戦度の単元中の変化

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 村瀬浩二・古田祥子・井沼瑠	4. 巻 70
2. 論文標題 ゴール型ゲーム単元でのTDC改訂版(TDC-r)の実践と効果の検証	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 和歌山大学教育学部紀要（人文科学）	6. 最初と最後の頁 99 - 104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19002/AN00257999.70.99	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 村瀬浩二・狭間俊吾・富嶋瑛	4. 巻 4
2. 論文標題 水泳授業における没頭度の変化：小学校2年生を対象に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 和歌山大学教職大学院紀要：学校教育実践研究	6. 最初と最後の頁 59-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19002/AA12779311.4.59	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 井沼瑠・村瀬浩二	4. 巻 69
2. 論文標題 ゴール型ゲームにおける子どもの学び：児童の対話と教師の働きかけからの検証	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 和歌山大学教育学部紀要．教育科学	6. 最初と最後の頁 91-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19002/AN00257966.69.91	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 村瀬浩二・橋本大地・池田拓人	4. 巻 第 68 巻 第 2 号
2. 論文標題 中学校体育におけるハードル走単元での学びの検証：協調学習実践校でのICT機器による課題提示と問題解決場面を設定して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 和歌山大学教育学部紀要．教育科学	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://dx.doi.org/10.19002/AN00257966.68(2).1	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村瀬浩二・安部久貴・梅澤秋久・小坂竜也・三世拓也	4. 巻 37
2. 論文標題 小学校体育授業における体育勤勉性尺度の開発	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 スポーツ教育学研究	6. 最初と最後の頁 1~17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.7219/jjses.37.1_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計13件(うち招待講演 0件/うち国際学会 5件)

1. 発表者名 Koji Murase, Hisataka Ambe
2. 発表標題 Consideration of causal relation between industry and exercise competence
3. 学会等名 24th European College of Sports Science, Prague (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村瀬浩二・井沼瑤・古田祥子
2. 発表標題 中学校バスケットボール単元におけるアダプテーションゲームの実践
3. 学会等名 日本体育学会第70回大会, 横浜
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井沼瑤・村瀬浩二・古田祥子
2. 発表標題 小学校体育ゴール型ゲームにおける児童の学びと人間関係の変化
3. 学会等名 日本体育学会第70回大会, 横浜
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村瀬浩二・梅澤秋久・安部久貴
2. 発表標題 TDCを用いた発問による省察力を高める試み：小学校のボール運動単元を対象に
3. 学会等名 第39回日本スポーツ教育学会大会，東京
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Koji Murase, Hisataka Ambe
2. 発表標題 Resistance to Adaptation game. : A practical study of Adaptation Games in a unit of Basketball
3. 学会等名 6th International Game Sense Conference, Tokyo (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村瀬浩二
2. 発表標題 ゴール型ゲームにおける勤勉性 -教師の共有課題に関わる働きかけの影響-
3. 学会等名 日本スポーツ教育学会第38回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 村瀬浩二・井沼瑤
2. 発表標題 小学校体育授業におけるゴール型ゲーム「ゼースボール」の実践 - 「体育勤勉性」と「運動有能感」による量的検証 -
3. 学会等名 日本体育学会第69回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井沼瑠・村瀬浩二
2. 発表標題 小学校体育授業におけるゴール型ゲーム「ザースボール」の実践 - 観察による質的検証 -
3. 学会等名 日本体育学会第69回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Koji Murase
2. 発表標題 Consideration of causal relation between industry and exercise competence :In fourth grade PE ball game units
3. 学会等名 ECSS Prague2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村瀬浩二・梅澤秋久・安部久貴・小坂竜也・三世拓也
2. 発表標題 ゴール型ゲームの実践における勤勉性と運動有能感の変容
3. 学会等名 日本スポーツ教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 村瀬浩二・梅澤秋久・彦次佳
2. 発表標題 スポーツ参加に影響する性格特性
3. 学会等名 日本体育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Koji Murase, Takuya Mise, Hisataka Ambe
2. 発表標題 A case study of physical education in a multi-grade class: Spontaneously emerged adaptation game
3. 学会等名 The 8th Pacific Rim Conference on Education (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Takuya Mise, Koji Murase
2. 発表標題 Conceptualization of behavior by the person with AD/HD tendencies in the class of physical education
3. 学会等名 The 8th Pacific Rim Conference on Education (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 梅澤秋久・苫野一徳編著 村瀬浩二ほか著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 274
3. 書名 真正の「共生体育」をつくる	

1. 著者名 村瀬浩二・西脇公孝	4. 発行年 2019年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 80
3. 書名 中学校体育でのアダプテーションゲーム(体育科教育6月号)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	安部 久貴 (Ambe Hisataka) (40634556)	北海道教育大学・教育学部・准教授 (10102)	
研究 分 担 者	梅澤 秋久 (Umezawa Akihisa) (90551185)	横浜国立大学・教育学部・教授 (12701)	